

リレー連載
物流がら見た
道路交通計画

輸送経路

災害に備えたロジステイクスは、被災者の生存に関わる極めて重要な取り組み。災害の種類（噴火、台風、集中豪雨など）や規模（震度の大小、雨量の多寡など）、発生時期（季節、時間帯など）によって、災害への対応は大きく異なる。発生が危惧される事態を想定し、対応方策を考え、災害に備えておくべきだ。

東日本大震災では物資停滞

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災では、被災地への緊急支援助物資の輸送は困難を極めた。首都圏の倉庫も燃料不足も相まったり、輸送に掛かる時間が長くなり、被災地での物資集積場所では、自治体職員の物流に対するノウハウ不足のため、仕分けに手間取り、大量の物資が滞留。さらに、道路の被災により物資が被災者までなかなか行き渡らなかった。



内田 大輔氏（うちだ だいすけ）昭和47年生まれ。徳島大卒。技術士。建設技術研究所東京本社道路・交通部

を担う。この際、①関係者間の連携や情報の伝達、共有方法を確立した上で、②災害の種類、発生した時期、発生からの時間経過に応じて物資の品目と必要量が変動することを理解しておくことが重要だ。

防災とロジスティクス

第9回

「避難期」、徐々に安定した生活に移り変わる「救済期」、生活復興のための「復興期」の三つの期間が考えられる。ここでは、緊急支援助物資が特に必要な「避難期」の支援助物資輸送について考える。

重要で、その際には三つで検討しておくこと。物流は準備・情報・使命で備え。一つ目は、東日本大震災で得た教訓に加えて、災害の種類や規模、発生時期の違いを考慮しながら、必要な物資の品目と量、輸送方法などについて検討しておくこと。東日本大震災では、燃料不足が大きく取り上げられたこともあり、インタンクによる燃料備蓄が通行可能な道路を示した地図が公開された。だが、乗用車が通行可能でも、二斗車が通行可能とは限らない。

災害に備えたロジスティクスのポイント

- 東日本大震災の教訓**
- 関係者の連携や情報の伝達・共有方法を確立すること
 - 普段から災害発生に備えて、緊急支援助物資の品目や必要量を考えておくこと
- 災害に備えたロジスティクスの留意点**
- 災害の種類や規模、発生時期の違いを考慮しながら、必要な物資の品目と量、輸送方法などについて検討しておくこと
 - 正確な情報を入手すること
 - 災害発生時の緊急支援助物資輸送に携わることは物流業者の使命と肝に銘じること

災害発生時とはいえ、通常業務を怠ることはできず、緊急支援助物資輸送に対応すれば配車や輸送計画などに困難が生じるだろう。だが物流事業者以外にこの取り組みを担う者はいない。物流は市民の生活や産業に不可欠なものだ。災害発生時にはなおさら、市民は物流事業者が届けられる物資を一日千秋の思いで待ち焦がれていることを、常に心に留めておくべきだ。